

外出時間にみた大都市圏郊外住民の余暇活動の空間構造

—町田駅周辺住民を対象に—

澁谷和樹

立教大学大学院生

本研究は町田駅周辺住民を対象に、余暇時間の活動の空間構造を考察した。余暇活動は外出時間の長さや目的地への訪問頻度に応じて、日帰り観光、短時間観光、日常的余暇に分類される。

日帰り観光の訪問先は東京都心や横浜周辺などの町田駅から長距離の場所が対象となる一方、短時間観光と日常的余暇の訪問先は町田駅周辺や町田駅から10km圏内に集中する。余暇活動類型と就業状況との間には関連がみられ、非日常的な訪問先での余暇活動であると、仕事による活動実施への制約が確認される。

日帰り観光と短時間観光は、見学・鑑賞、体験、飲食が中心であるが、実施場所には差がある一方、日常的余暇は飲食や趣味・創作活動は短時間観光よりも広範囲に対象地が広がっている。外出に不可欠な移動について、その手段をみるとすべての類型でアクセスや利便性が考慮されており、差がみられなかった。

キーワード：日帰り観光、短時間観光、日常的余暇、東京大都市圏郊外、町田駅

I はじめに

余暇時間の増大にともない、現代社会は余暇が重要な価値をもつようになった（瀬沼，2004）。日本人は余暇時間に国内観光やドライブ、外出などを多く行い（日本生産性本部編，2014）、余暇時間での活動は外出と切っても切れない関係にあることから、余暇時間における人の行動を空間的に研究する必要性が依然としてあろう。

多くの住民を抱える大都市圏郊外は、余暇に対する需要が多いことから、郊外住民を対象とした余暇行動空間研究が行われてきた。浅香・沢田（1970）は神奈川県中・西部の住民の映画鑑賞やデパート利用などの目的地の傾向から都市圏の変容を明らかにした。高橋・高林（1978）は浜松市住民の居住地を都市、郊外に分類し、それぞれの行動空間の差を明らかにし、落合（1991）も神奈川県中西部住民の余暇時間での行動圏域を設定した。鄭・洪（1999）は福岡県のニュータウン住民の余暇時間の行動を分析し、回答者の属性による

行動範囲の差を解明した。

これらの研究では余暇活動を、活動の行われる曜日や活動に費やす時間といった時間的側面と、活動対象地の選択傾向という二つの側面から分類している。高橋・高林（1978）は余暇活動を「平日型余暇活動」、「週末型余暇活動」、「観光型余暇活動」に、落合（1994）は「平日型余暇活動」と「休日型余暇活動」に分類し、さらに休日型を「週末型余暇活動」「連休型余暇活動」に分けている。また、鄭・洪（1999）もこれらの研究を踏襲し、活動を「平日型」と「休日型」に区分している。落合（1991，1994）では、「平日型余暇活動」を平日の仕事終了後の2～3時間ほどの短時間にでもできる日常的な活動であり¹⁾、活動対象地の選択傾向が恒常的であるとし、「週末型余暇活動」を週末や休日に半日や1日を費やして行われる非日常的な活動であり、活動対象地の選択傾向は恒常的な場合と非恒常的な場合があるとしている。

余暇活動の時間的側面と対象地の選択傾向に関連があると前提を置く背景には、時間地理学で研

究が進んだ、仕事などによる余暇活動への時間的制約があると推測できる。例えば、岡本（1995）は都心就業者の大都市圏郊外住民が就業時間や通勤時間の影響で、帰宅後に居住地近辺で食事や買い物を行うことができず、それらを都心や帰宅途中に行うことを明らかにしている。荒井ほか（1996）は、乳幼児のいる専業主婦は育児が平日の余暇活動の実施に対して制約となっていること、小中学生のいる家庭では主婦は土日に子供の世話にかかる時間が増加するために、その日の外出が抑制されてしまう可能性を指摘している。このように、就業状況や子供の存在が余暇活動の実施や活動対象地の選択に影響を与えている。そして、仕事などの制約が大きい平日には短時間の恒常的な対象地での余暇活動が、制約の小さい休日には長時間の非恒常的な対象地での余暇活動が想定されているといえよう。

ただし、余暇活動はこれらの制約によってのみ対象地が決まるわけではなく、活動者の能動的な選択によっても決定されるだろう。特に、休日の活動は制約が小さいものとなるであろう。その場合、活動時間によっていかなる活動目的を有するのか、目的地までどのような移動手段を用いるのか、などといった活動内容そのものの分析も重要である。活動内容そのものと活動時間量との関係については、非日常生活圏の余暇活動である観光を対象とした研究でも蓄積がある。

活動目的について、高橋・高林（1978）や落合（1991, 1994）は余暇活動類型によりそれが異なることも示しており、落合（1991）は平日型余暇活動として習い事やパチンコ、外食を、週末型としてコンサート・映画鑑賞やショッピングなどを取り上げている。また、吉田ほか（2008）は短時間の観光が長時間の観光とは異なる活動目的を持つことを、杉本ほか（2013）は美術館での鑑賞活動が長時間を要しやすいことを示唆している。

Vassiliadis et al.（2013）は利用可能時間に限りがあるときには、より短い時間で行うことのできる活動を実施することにより時間の不足に対応していると述べている。

自宅外での余暇活動では移動が不可欠であり、移動手段の選択が外出時間に関わるだろう。落合（1991）は週末型余暇活動の対象地について、都市的な対象地は鉄道利用による所要時間により規定され、郊外の対象地は自家用車による所要時間に規定されるとした。Lew and McKercher（2006）は、観光において自家用車は時間の利用方法に柔軟性があると説明している。さらに、旅行者の中には移動時間を最小限にすることにより、滞在先での時間を最大化しようとするものもいる一方で、移動自体が観光の目的となることも指摘している。旅行者はみずから利用可能な余暇時間を念頭に入れて行動する傾向があり（橋本, 1993）、利用可能な時間が短いとより居住地から目的地までの移動時間を短くしようとする、効率的に到達できる移動手段を選択することが想定される。

以上をまとめると、高橋・高林（1978）や落合（1991, 1994）、鄭・洪（1999）などの余暇活動類型は、仕事や家事育児による制約のもと行われる平日の余暇活動と、それらの制約が相対的に少ない休日の余暇活動を、時間的制約と活動内容の両面から分析したものと考えられる。ただし、先行研究での余暇活動類型では短時間の非恒常的な場所での余暇活動が把握対象から抜け落ちている。日本人の行楽や散策に費やす時間は平日で2時間程度、休日でも3時間程度と短いことから（NHK放送文化研究所, 2016）、落合（1991）の「平日型余暇活動」であっても、非恒常的な対象地の選択が行われていると考えられる。

また、前田・橋本（2010）などが説明するように、非恒常的な対象地への余暇時間の外出を観光

と捉えるならば、短時間の非恒常的な場所での余暇活動を、吉田ほか（2008）が提唱する短時間観光として捉えることも可能である。吉田ほか（2008）は、日常生活において反復して行われないう短時間の余暇活動を短時間観光と位置付け、その活動目的の把握を試みており、短時間の非恒常的な対象地での余暇活動の存在が想定される。大都市圏郊外は時間地理学が明らかにしてきたように、就業や家事育児による余暇活動への時間の制約が大きく、短い時間での余暇活動が多くなることが予想される。また、1990年代以降に商業開発が進んだことにより、居住地近くの余暇活動対象地が増加し、少ない移動時間で多様な活動を行える環境となった。したがって、大都市圏郊外住民の余暇活動を把握するうえで、短時間観光の存在は重要であると考えられる。しかし、吉田ほか（2008）では短時間観光にのみ焦点を当てただけであり、活動時間や活動対象地の選択傾向を指標とした他の余暇活動類型と、対象地の場所や活動内容にいかなる差が見られるのかについて、検証が十分にされたとはいえない。

そこで、本研究は地理学で行われてきた余暇活動分類に短時間観光の概念を取り入れて余暇活動の類型化を行う。その類型ごとの目的地の分布を、就業状況、活動目的および移動手段の側面から分析することにより、外出時間と対象地の選択傾向の差による余暇活動の特性の違いを明らかにする。

II 調査対象地域および研究方法

1. 調査対象地域

東京都町田市は東京都と神奈川県の間境に位置する人口約42万人の郊外都市である²⁾。町田市は幕末に八王子と横浜を結ぶ日本の「シルクロード」の中継地点として発展してきた（小島，2009）。その後、1909年にJR横浜線が、1927年

に小田急線が開通したことを契機に、東京郊外のベッドタウンとして開発が進んだ。

町田市の発展の中心となった町田駅は、小田急線で新宿駅まで約40分、JR横浜線で横浜駅まで約30分の場所に位置する。このような東京都心や横浜への鉄道利便性の良さから、町田駅は東京大都市圏郊外の交通の結節点としての機能を有し、駅周辺では商業機能の集積が進み、ショッピングや飲食などの都市的娯楽が数多く提供されている。また、町田市と相模原市の市境には国道16号線が通り、商業施設のロードサイド立地も進んだ。2000年以降にはショッピングモールが町田駅以外の駅周辺で立地するようになり、例えば2000年には南町田駅にグランベリーモールが開業した。その結果、町田駅周辺住民は近隣駅の複合商業施設で多様なサービスと娯楽を享受できるようになった。

この他にも、町田市は多摩丘陵の自然が残っており、薬師池公園や小山田緑地といった自然公園も立地している。さらには、プロサッカークラブFC町田ゼルビアのホームスタジアムの野津田公園もあり、商業機能から構成される娯楽以外にも存在している。

前述したように、町田駅は新宿や横浜へのアクセスが良く、町田駅周辺住民は大都市での余暇も享受しやすい環境にある。また、小田急線沿線には箱根や江の島、丹沢大山国定公園などがあり、自然や温泉、寺社を核とした観光地が立地している。

このように、町田市は余暇活動の対象となり得る商業・娯楽施設や自然環境を有するだけではなく、市外の観光地や大都市とのアクセスも良い。したがって、短時間でも様々な観光行動も行うことができるため、短時間観光を調査する良い事例であると考えられる。

2. 調査概要および研究方法

本研究では大都市圏郊外住民の余暇活動の実態を明らかにするために、東京都町田市の住民にアンケート調査を行った。

アンケートの配布地域は町田市の中心駅である小田急およびJR町田駅からおよそ1～2kmの場所に位置する町田市旭町地区と、その周囲の中町地区、森野地区、原町田地区、本町田地区である(図1)。アンケート用紙は旭町地区の住宅に配布するとともに、旭町地区の一部の住民とその他の地区住民には、面会しアンケートへの協力を依頼した。アンケートの質問項目は回答者の個人属性と回答日から2週間前までに行った余暇時間での日帰りの外出に関する項目から構成されている。回答者の個人属性では、年齢や職業、家族構成などを、外出に関する項目では日時、主要訪問先³⁾、全活動目的および活動主目的、時間数、訪問頻度を設定した。

アンケート用紙は2012年9月10日から同年9月14日に配布し、配布総数は731通であった。アンケート回収数は201通(27.5%)、有効回答数は149通(20.4%)であった。

本研究ではこのアンケート調査から得られたデータを用い、町田駅周辺住民の余暇行動空間の特徴を明らかにしていく。まず、次節では観光の定義や先行研究をもとに余暇活動の類型化を行う。その類型に従い、Ⅲでは余暇活動類型別の対象地の分布を概観した。Ⅳでは余暇活動類型別の外出曜日の傾向と訪問先までの距離を就業状況から分析し、余暇活動に就業状況が与える制約の側面を明らかにした。次いでⅤでは余暇活動類型を活動目的から分析し、余暇活動類型別の活動目的の構成、訪問先と活動目的の関係を考察した。Ⅵでは外出時間の長さとの関係が指摘されている移動手段について、訪問先の分布との関係を明らかにした。ⅢからⅥでは訪問先の分布を地図上に示し、その空間的な偏りを分析した他に、町田駅から訪問先までの距離を10km単位で集計し、その傾向を明らかにした。さらに、余暇活動類型ごとの町田駅から訪問先までの平均直線距離を比較するために、一元配置分散分析⁴⁾とTukey-Kramerの検定を行った。この分析にはSPSS21を使用した。

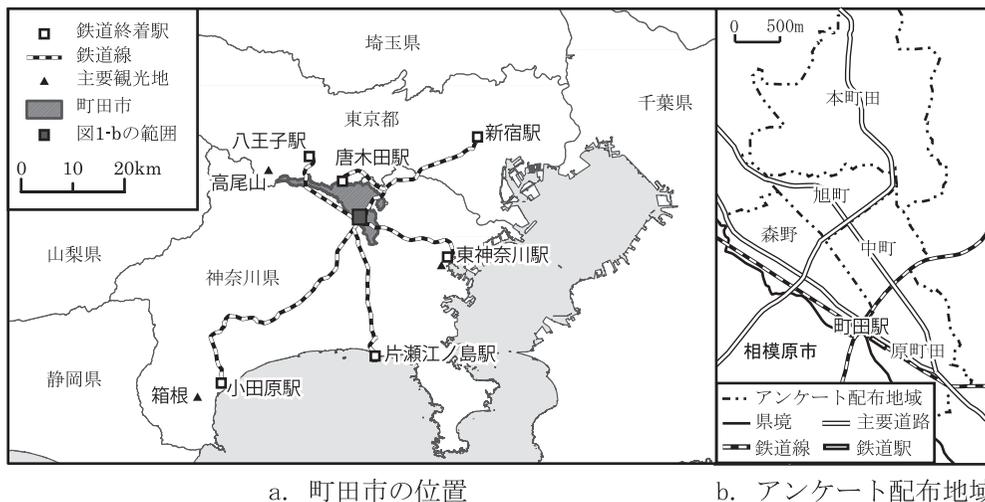


図1 調査対象地域

3. 余暇活動の類型化

本研究で取り入れる短時間観光について、吉田ほか（2008）は「特産品に限らない買物や繁華街の散策といった、短時間の活動も、それが市民の日常生活において反復して行われるものでなければ、観光行動として位置付けることが可能である」と述べている。この問題意識から吉田ほか（2008）は、従来観光として捉えられてこなかった、商業施設でのショッピングや映画、演劇、音楽鑑賞なども観光と捉えられると指摘している。また、国土交通省の「旅行・観光消費動向調査」や日本観光振興協会の「国民の観光に関する動向調査」において、日帰り観光が半日以上のもをを対象にしていることから、半日未満の観光が把握されてこなかったとも指摘している。

ただ、吉田ほか（2008）が提唱した短時間観光は明確に定義されたものとはいえず、また本研究では地理学で行われてきた余暇活動研究と接合させる必要がある。そこで、観光の定義をもとに短時間観光を定義し、余暇活動を類型化する。

日本における公式な観光の定義として、観光政策審議会が提示した「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」がある。岡本（2001）はこの定義から、観光が時間的側面と空間的側面、目的の3側面が交わるところに位置していると指摘している。そこで、これらの時間、空間、目的の3側面から短時間観光の定義を行う。

時間的側面について、1日24時間は「生理的必需時間⁵⁾」、「社会生活時間⁶⁾」、「余暇生活時間（以下余暇時間⁷⁾」に分類され（藪田，2008）、観光はこのうち余暇時間に含まれる。従来の観光では余暇時間に半日以上行われるものが観光であり、半日未満であるものが短時間観光であるといえよう。

空間的側面について、従来から日常生活圏を離れることが定義に含まれている。日常生活圏は居住地からの距離により定められることがあるが、前田・橋本（2010）は交通機関の発達などにより、移動の条件は人によって異なり、また社会構造との関係でその範囲が大きく変化するため、日常生活圏は相対的かつ流動的であると指摘している。つまり、観光は単に距離の問題ではなく、日常的には行かない所への一時的移動である。このような指摘から、本研究は訪問頻度を指標として日常生活圏を離れているかを判断する。本研究では1日や1週、1カ月の単位で定期的に訪れる場所を日常生活圏であるとみなし、それよりも低い頻度で訪れた場合、日常生活圏を離れたとみなす。

目的の側面について、瀬沼（2005）は観光の目的を「つくる」、「する」、「休む、みる」に分類している。この分類は余暇の機能として一般的に用いられるデューマズディエによる「自己開発」、「気晴らし」、「休息」という分類と一致するという。岡本（2001）も観光を旅行を伴う余暇活動であると捉えることにより、休息型、気晴らし型、自己実現型に類型が可能であると指摘しており、デューマズディエの分類が観光の定義へ応用可能であると考えられる。

以上のことから、本研究では短時間観光を「自己開発、気晴らし、休息を目的とした余暇時間に行う半日以下の非日常生活圏の活動」と定義する。また、本研究では時間的指標の半日を吉田ほか（2008）の短時間観光の特徴とアンケート調査から得られたデータを照らし合わせ、6時間に設定した。この時間設定と訪問頻度の指標を組み合わせ、本研究は6時間以上の非日常的な余暇時間の外出を日帰り観光、6時間未満の非日常的な余暇時間の外出を短時間観光、外出時間とは関係なく日常的な余暇時間の外出を日常的余暇と定義する（表1）。

Ⅲ 余暇活動類型別訪問先の分布

1. 日帰り観光

本研究の余暇活動類型に基づきアンケート調査から得られた余暇行動を分類したところ、日帰り観光が90件、短時間観光が172件、日常的余暇が221件であった。日帰り観光は時間に余裕のある限られた日で行えないため、件数が最も少なく、日常的余暇は1週間ごとやそれよりも多い頻度で行われるので件数が最も多くなったと考えられる。

各余暇活動類型での町田駅から訪問先までの平均直線距離をTukey-Kramerの検定で比較した結果、日帰り観光は短時間観光と日常的余暇ともに有意な差がみられた。日帰り観光の行動範囲を町田駅から訪問先までの距離に応じて集計した⁸⁾ものが図2であり、訪問先を町丁ごとに集計し、活動件数を示したものが図3である。これを見ると、日帰り観光の訪問先は町田駅から20km以上30km未満の範囲で最多であり、次に町田駅から30km以上40km未満の範囲での件数が続いている。これは、図3が示すように、東京都心や横浜周辺⁹⁾への外出が多く存在しているためである。東京都心の中で、新宿区は劇場や映画館などへ8件の、横浜市もみなとみらいや横浜中華街が存在する中区と西区に5件の外出がある。

40km圏外では、町田駅から直通電車のある箱根町への外出も5件あり、新宿区や横浜市と併せて考えると、町田駅からのアクセスの良さが日帰

り観光の目的地選択に重要であることが推測される。箱根町が位置する町田駅から40km圏外の外出数が多いのも、日帰り観光の特徴である。箱根町以外にも、山梨県の山中湖村や甲州市へ、千葉県印西市のゴルフ場や富津市のレジャー施設への外出が行われている。これらの場所へは移動に長時間を有するため、結果として外出時間が長くなったと考えられる。

2. 短時間観光

短時間観光は日帰り観光とは異なり、町田駅周辺¹⁰⁾と町田駅から10km圏内に訪問先が集中し、町田駅周辺だけで短時間観光の42.4%を、それらを除く町田駅から10km圏内では35.5%を占めている。したがって、非日常的な外出は移動範囲と外出時間が相関関係にあることを示唆しており、移動時間の短さが、外出時間の長さにつながっていると考えられる。

図3-bをみると、日常的余暇よりも短時間観光の割合が高い町丁が存在していることが分かる。例えば、南町田駅周辺の3つの町丁は全13件の訪問のうち、10件が短時間観光であり、古淵駅周辺の2つの町丁は全15件の訪問のうち、10件が

表1 本研究における余暇活動類型

		時間	
		6時間以上	6時間未満
頻度	月1回未満	日帰り観光 (n=90)	短時間観光 (n=172)
	月1回以上	日常的余暇 (n=221)	

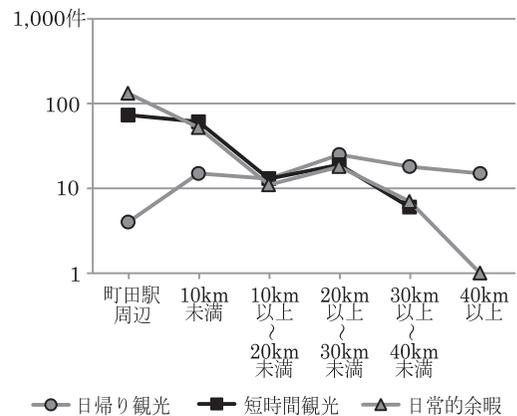


図2 余暇活動類型別行動範囲と件数

(アンケート調査より作成)

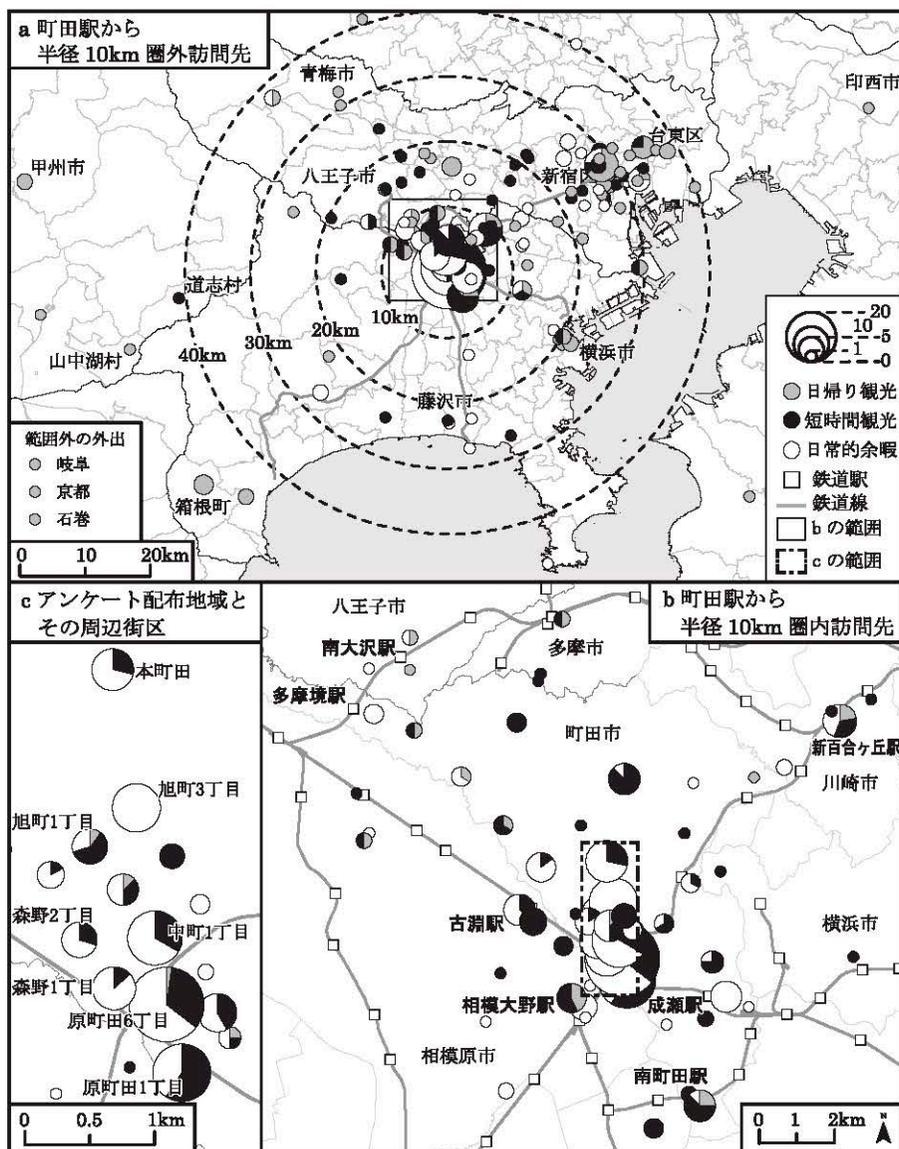


図3 訪問先の空間的分布

(アンケート調査より作成)

短時間観光である。いずれの訪問先もレジャー施設を併設した大型商業施設であり、吉田ほか(2008)で短時間観光の訪問先とされた商業施設が、本調査でも短時間観光の重要な活動場所となっていた。このことは、図3-cの原町田地区に

おいても確認され、37件の短時間観光での訪問のうち、15件が百貨店や量販店であった。

この他にはアンケート配布地域より北の町丁や多摩市で短時間観光の割合が高い。多摩市は南町田駅周辺同様に鉄道での訪問には乗り換えが必要

であり、頻繁な訪問には結びつかなかったと考えられる。

3. 日常的余暇

日常的余暇と短時間観光の町田駅から訪問先までの平均直線距離をTukey-Kramerの検定で比較すると、有意な差はあらわれなかった。また、図2および図3をみると、日常的余暇も短時間観光と同様に、町田駅周辺と町田駅から10km圏内に訪問先が集中している。これは、頻繁に訪問するため、アクセスの良い居住地近くを選択しているためだと推測される。

その町田駅周辺を示した図3-cをみると、旭町1丁目や原町田1丁目などを除き、日常的余暇が半数以上を占めている。特に、森野1丁目は全訪問の80.0%を日常的余暇が占め、旭町3丁目はすべてが日常的余暇である。これらの町丁は運動関連施設への訪問が大半を占めている。同様に、成瀬駅周辺では日常的余暇のみの訪問が認められる町丁があり、ここも市立の体育館およびその付帯施設への外出であった。このことから、日常的余暇が訪問の大半を占める町丁では活動目的が訪問先の傾向に関係してくることが予測される。ただし、原町田6丁目のように日常的余暇でも、百貨店への外出は認められるため、余暇活動類型と活動内容、訪問先の関係については詳細に検討する必要がある。

IV 余暇活動類型と就業状況

1. 就業状況別の外出曜日傾向

まず、回答者の属性をみると、職業のうち勤め人・自営業者が51人と最も多く、40歳・50歳代で半数以上を占めている（表2）。一方、23人いる無職者の大半は60歳以上が9割以上を占め、また全員男性であり、職業により回答者の年齢、性別に偏りのある属性も確認される。

図4は就業状況別の活動曜日の傾向を示したものである。就業状況と活動曜日の関係を見ると、日帰り観光では、勤め人・自営業者、パートタイマーは平日の割合がそれぞれ21.0%と15.0%である一方で、専業主婦と無職者は平日が60%後半を占めている。この結果から、仕事が日帰り観光の実施に対して、大きな制約となっていることがわかる。

専業主婦は平日に日帰り観光を行っていることが図4からわかる。しかし、一般的には荒井ほか（1996）や若生ほか（2001）が指摘したように、子供の存在が余暇活動に制約を与えていることが想定されよう。本研究では専業主婦42人のうち、37人の末子が高校生以上、もしくは独立した状態であったため、彼女たちは家事・育児による時間的制約が子育て家庭と比較して小さく、平日に日帰り観光が可能であったと考えられる。

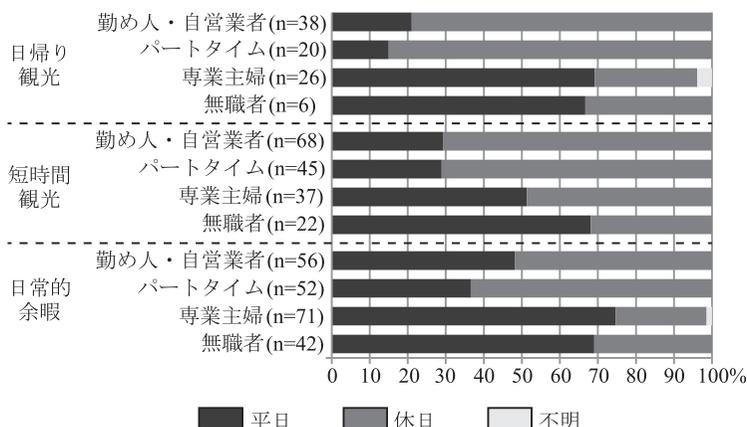
短時間観光では勤め人・自営業者とパートタイマーの平日外出の割合が増加しているため、仕事

表2 調査対象者の属性

（単位：人）

		年齢					総計
		30歳代以下	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	
職業	勤め人・自営業者	9	17	19	5	1	51
	パートタイム	0	13	10	8	1	32
	専業主婦	6	5	11	11	9	42
	無職者	2	0	0	8	13	23

（アンケート調査より作成）



勤め人・自営業者，パートタイマーについては就業日を平日に，非就業日を休日に分類し，専業主婦と無職者については，月曜日から金曜日を平日に，土曜日と日曜日を休日に分類している。

図4 就業状況別の活動曜日傾向

(アンケート調査より作成)

の時間的制約は日帰り観光と比較して小さくはなっている。しかし、勤め人・自営業者，パートタイマーは短時間観光の70%近くを休日に行っており，短時間観光は仕事による時間的制約を依然として受けている。したがって，短時間観光は日帰り観光と同様に時間の余裕のある時に行ったものが多く存在していることが想定される。

日常的余暇は日帰り観光，短時間観光と比較して勤め人・自営業者，パートタイマーの平日の外出の割合が増加している。この結果をみると，日常的余暇はその実施においては仕事の制約が相対的に小さいものであり，仕事後にも行うことのできる活動であると考えられる。

2. 活動曜日と訪問先の関係

表3は活動範囲を就業状況と活動曜日の関係からまとめたものである。活動数に差があるものの，勤め人・自営業者の日帰り観光は平日と休日ともに町田駅から20km圏外の外出の割合が70%を占めており，専業主婦も平日と休日の20km圏外への外出がともに50%以上を占めている。こ

のように，たとえ就業日であっても長時間の余暇時間を確保できる場合は，休日と同様に広範囲の外出が行われる。

勤め人・自営業者とパートタイマーの短時間観光での活動範囲に平日と休日で違いがみられる。勤め人・自営業の平日の活動範囲は，町田駅周辺が60.0%であるのに対して，休日は町田駅周辺が37.5%であった。パートタイマーも平日の町田駅周辺への外出が90.0%以上であったのに対し，休日ではその割合が46.9%にまで減少している。一方の専業主婦は平日と休日でも外出範囲に違いがみられない。

日常的余暇の外出傾向をみると，勤め人・自営業とパートタイマーとも平日の方が町田駅周辺に外出が集中する傾向にある。しかし，短時間観光と比較して，休日の町田駅周辺への外出の割合が高いことから，就業者は就業日であるかにかかわらず，日常的な外出先が自宅周辺に集まる傾向にある。

このように，就業状況によって，平日と休日の外出傾向に差がみられる。特に非日常的な余暇活

表3 就業状況別行動範囲

	職業	曜日	町田駅 周辺	10km 未満	20km 未満	30km 未満	40km 未満	40km 以上
日帰り 観光	勤め人・ 自営業者	平日	0.0	12.5	0.0	25.0	25.0	37.5
		休日	3.3	16.7	10.0	26.7	20.0	23.3
	パートタイム	平日	0.0	0.0	66.7	33.3	0.0	0.0
		休日	5.9	29.4	17.6	23.5	17.6	5.9
専業主婦	平日	11.1	11.1	11.1	27.8	27.8	11.1	
	休日	28.6	0.0	14.3	28.6	28.6	0.0	
無職者	平日	0.0	0.0	25.0	0.0	25.0	50.0	
	休日	28.6	0.0	14.3	28.6	28.6	0.0	
短時間 観光	勤め人・ 自営業者	平日	60.0	20.0	5.0	15.0	0.0	0.0
		休日	37.5	37.5	10.4	10.4	4.2	0.0
	パートタイム	平日	92.3	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
		休日	46.9	34.4	6.3	6.3	6.3	0.0
専業主婦	平日	47.4	31.6	5.3	10.5	5.3	0.0	
	休日	44.4	38.9	0.0	11.1	5.6	0.0	
無職者	平日	13.3	26.7	20.0	33.3	6.7	0.0	
	休日	57.1	42.9	0.0	0.0	0.0	0.0	
日常的 余暇	勤め人・ 自営業者	平日	66.7	14.8	0.0	14.8	3.7	0.0
		休日	58.6	24.1	10.3	0.0	3.4	3.4
	パートタイム	平日	73.7	15.8	0.0	10.5	0.0	0.0
		休日	69.7	24.2	3.0	0.0	3.0	0.0
専業主婦	平日	71.7	11.3	3.8	13.2	0.0	0.0	
	休日	41.2	41.2	0.0	17.6	0.0	0.0	
無職者	平日	55.2	17.2	10.3	3.4	13.8	0.0	
	休日	46.2	30.8	15.4	7.7	0.0	0.0	

1) 表中の数字は、各属性ごとに平日・休日別の目的地までの移動距離の割合を示したものである。

2) ■は、50%以上の外出を、■は25%以上の外出を示している。

(アンケート調査より作成)

動である日帰り観光と短時間観光は、仕事による時間的制約のため、平日に行くことが難しい。外出範囲をみると、日帰り観光はたとえ就業日であっても、長時間の余暇時間が確保できれば外出範囲に平日と休日に変化がみられない一方で、短時間観光は就業日では外出範囲が自宅付近に集まる傾向がみられた。すなわち、平日の就業者の短時間観光は就業後のわずかな時間に行く、居住地

近くの普段訪れない場所への外出である。しかし、就業者の短時間観光の多くは時間に余裕があると推測される休日に行われている。したがって、就業という制約の側面から短時間観光を捉えるだけでは不十分である。余暇活動類型ごとの活動目的や移動手段といった活動内容の側面からも分析することにより、時間と余暇活動との関係がより解明できるだろう。

V 余暇活動類型と活動目的

1. 活動構成

図5はそれぞれの余暇類型ごとに主目的となった活動の構成比を示したものである。余暇活動類型ごとの活動内容について、カイ二乗検定を行った結果、 $p=0.00$ となった。したがって、余暇活動類型によって、活動内容に差がみられると解釈できる。

日帰り観光では、見物・鑑賞が50.0%を、体験が20.0%を、飲食が13.3%を占め、これらで全体の80%を超えている。同様に短時間観光もこれら三つの活動で86.1%を占めており、見物・鑑賞、体験、飲食が非日常的な場所での余暇の中心な活動であるといえよう。ただし、短時間観光は飲食の割合が日帰り観光よりも高いという違いがあり、飲食を主要な活動とする場合には短時間の外出になりやすいこと示している。また、見物・鑑賞の割合は日帰り観光のほうが大きいですが、これは杉本ほか（2013）が考察したように、鑑賞には長時間を要するためであろう。

日常的余暇は日帰り観光と短時間観光とは異なる傾向を示しており、見物・鑑賞の割合が小さい一方で、運動が33.0%、趣味・創作が14.0%もあ

る。運動ではウォーキングやスポーツジムでの活動が含まれており、日々の健康増進を目的としているため、日常的な余暇活動となったと考えられる。趣味・創作活動では絵画や手芸、音楽の習い事が行われており、定期的に習う必要があるため、日常的余暇に分類された。

2. 活動目的と訪問先の関係

1) 日帰り観光

図6は余暇類型ごとの活動目的と訪問先の関係を示したものである。これを見ると日帰り観光で最も活動数が多かった見物・鑑賞が、東京都心に集中していることがわかる。東京都心が含まれる20km以上40km未満では演劇・音楽会が8件、美術館・博物館見学が7件、映画鑑賞が4件行われている。この範囲で件数が多い演劇・音楽会鑑賞の訪問先として国立競技場、新橋演舞場などが、美術館・博物館鑑賞の訪問先として上野周辺やサントリー美術館などの全国的に著名な施設がある。美術・博物館や演劇・音楽会は展示内容・演目によってその魅力が規定され、また内容の代替性が小さいため、町田駅から長距離移動をしても訪れるのであろう。

一方、映画は東京都心への外出よりも町田駅か

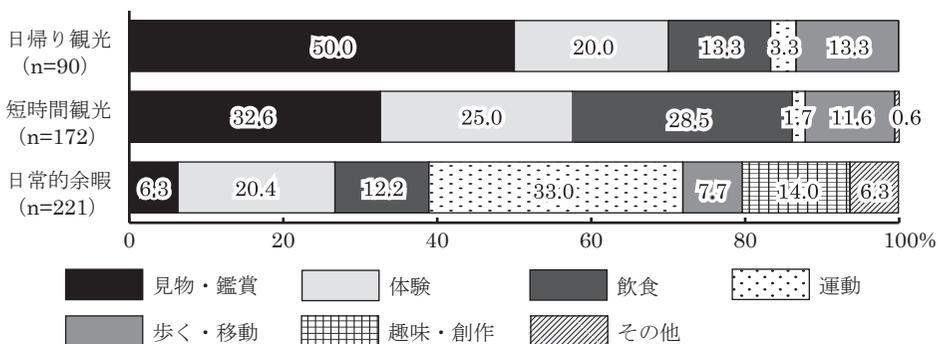


図5 活動類型別活動目的の構成

(アンケート調査より作成)

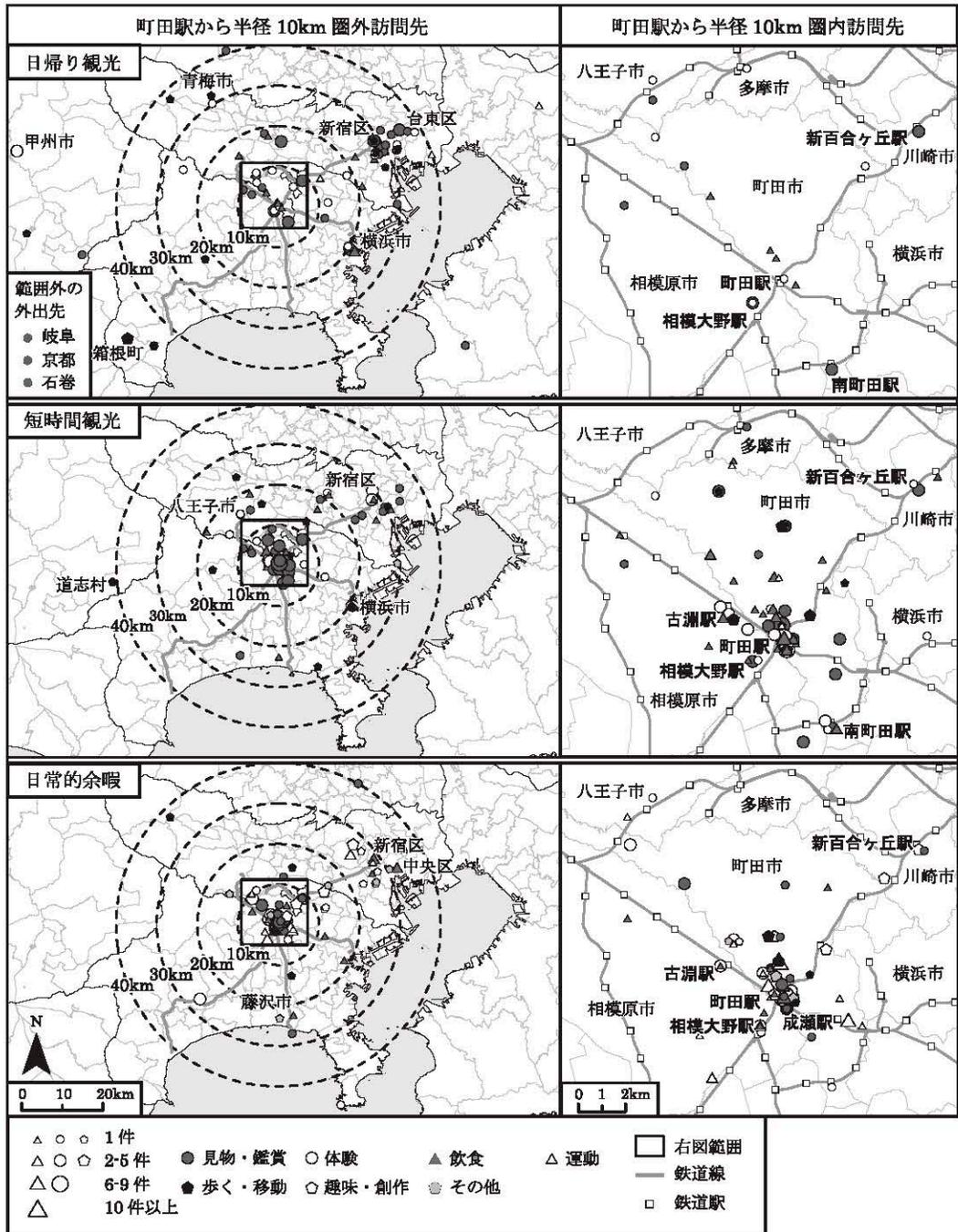


図6 活動目的と訪問先の関係

(アンケート調査より作成)

ら10km圏内でのそのほうが多い。1990年代以降にシネマコンプレックスが東京の郊外に進出し(上間, 2009), どこでも同じ映画を鑑賞できるようになった。この結果, 映画館の代替性が高まり, 町田駅から10km圏内への外出が多くなったと考えられる。

町田駅から40km圏外でも見学・観賞が確認される。これらは箱根での名所・旧跡見学や京都, 石巻での自然・風景鑑賞があり, その地域にしかない自然や歴史的風景の鑑賞が行われている。

このように長距離の移動を伴う日帰り観光の訪問先の共通点として, 目的地の代替性の小ささが挙げられる。そして, そのことが移動時間をかけてでも訪れる魅力となっていると推測される。

2) 短時間観光

短時間観光で活動数が最も多い見学・観賞の訪問先をみると, 日帰り観光とは異なり町田駅周辺とそこから10km圏内に集中していることがわかる¹¹⁾。短時間観光で行われる演劇・音楽会鑑賞は80.0%がこの範囲で行われており, 同じ活動であっても外出時間の長短によって行動範囲が異なっている。したがって, 日帰り観光と短時間観光の演劇・音楽会鑑賞での訪問先の違いは自宅からの移動時間の差によると推測される。この他に, 祭り見学が22件もこの範囲で行われている¹²⁾。町田駅周辺で短時間の祭り見学が頻繁に行われた理由としては, 対象となった祭りの開催時間が半日未満であることや, 学園祭の場合は自分の子供の様子を見てすぐに帰宅したためではないだろうか。

見学・観賞の他に体験や飲食も町田駅から10km圏内に集中している¹³⁾。体験の33件中16件がⅢの2で言及した大型商業施設で行われている。飲食はこの範囲で41件行われ, 町田駅周辺のレストランや百貨店内の飲食店, 古淵駅近辺の

ロードサイド立地の飲食店が訪問先である。このように町田駅周辺の商業施設やロードサイドの飲食店, 郊外型のショッピングセンターへ訪問しており, 郊外の商業発展を背景とした多彩な体験や飲食の選択肢の存在がその地理的集中を支えており, そこまでの移動時間の短さが短時間観光の集中へとつながったのであろう。

このように, 短時間観光の訪問先の空間的な狭さの要因としては, 演劇・音楽会鑑賞で日帰り観光と差が現れた移動時間の短さや, 祭りの見学のように活動に費やす時間の短さ, 郊外における商業発展による余暇対象地の増加が挙げられる。

3) 日常的余暇

日常的余暇で最も行われている運動は73件中69件が町田駅から10km圏内で行われており, 狭い範囲に極端に集中している。運動はどの施設でも同じことができるため, 対象者は居住地からのアクセスを優先し, 対象地が狭い範囲に集中したと推測される。

趣味・創作も日常的余暇のみで行われているものであり, 訪問先も町田駅から10km圏内のカルチャーセンターや公立学校, 公共施設に集中している。特に, 柿生駅や新百合ヶ丘駅などへも外出しており, 訪問先が運動よりも広範囲である。また, 町田駅から10km圏外でも川崎市や中野区, 台東区などへ外出している。習い事は何を習いたいかだけではなく, 誰に習うかということが教室の選択に関わってくるのに加えて, 習い事によっては教室が町田市外にしかないため, 広い範囲へ外出が行われていると推測される¹⁴⁾。

飲食も趣味・創作と同様に広範囲で行われている活動であるが, これは都心で就業する対象者が仕事後に職場の近くで行ったためである。体験は町田駅から10km圏内に集中し, 訪問先は百貨店やロードサイドの大型商業施設である。この点に

関しては、短時間観光と類似している。

このように日常的余暇は何度も繰り返し訪れるという性質のために、多くの活動で町田駅周辺に訪問先が集まっている。しかし、習い事のように場所が優先される活動や、就業場所の近くで行われやすい飲食では訪問先が広範囲に及んでいる。

VI 移動手段と訪問先の関係

1. 日帰り観光

図7は各類型の訪問先までの移動手段を示したものである。Ⅲで指摘したように日帰り観光では新宿区や台東区といった東京都心や横浜周辺に活動件数が多いが、それらの大半が鉄道利用であることがわかる。これは、東京都心へは小田急線を、横浜周辺へはJR横浜線を利用すれば1時間以内に到達できるという交通アクセスの良さが理由として挙げられる。

日帰り観光の訪問先で特有の町田駅から40km圏外では、鉄道利用が7件、自家用車利用が8件とほぼ同数である。鉄道では河口湖や箱根、強羅などの町田の西方へ移動しているものと、京都や岐阜、石巻といった100km以上の移動をしているものがある。自家用車は勝沼や箱根の他に、千葉県富津市のレジャー施設や印西市のゴルフ場へ外出している。富津市のように鉄道でのアクセスが良くない場所や、ゴルフ場のように道具を持参する必要がある外出では、自家用車のほうがアクセスや外出の負担が小さくなるため自家用車を利用したのであろう。また、首都圏を超える場所の場合、長時間の運転が必要なため、移動の負担を少なくするために鉄道を利用する傾向にあると考えられる。

2. 短時間観光

短時間観光でも日帰り観光と共通して、東京都心や横浜駅周辺への鉄道利用が大半を占めてい

る。この結果は、大都市へは外出時間の長短を問わずに鉄道での移動がされていることを示し、交通アクセスが優先されていることを表している。

町田駅から10km圏内をみると、日帰り観光と比較して、多様な移動手段が用いられているが、自家用車が134件中54件と広く用いられている。まず、鉄道は新百合ヶ丘駅や相模大野駅周辺への外出で使用されている。これらの駅はそれらを中心として商業が発展しており、鉄道での交通利便性が良いため、鉄道利用が中心となったと考えられる。また、これらの駅周辺は日帰り観光、日常的余暇でも鉄道が利用されている。

次に自家用車利用は古淵駅や南町田駅を最寄り駅とする場所への外出全20件のうち15件で用いられている。これらの訪問先は大規模な駐車場を併設した大型商業施設やロードサイド沿いに立地した飲食店や温泉施設であり、自家用車での利用客を多く受け入れることが出来るものである。また、古淵駅は調査対象地域からだと自家用車の方が鉄道よりも速く到達できることもその理由であると推測される。これらの他にも、町田市北部や相模原市との市境、多摩市といった鉄道線からやや離れた場所や鉄道では乗換が必要な場所へは自家用車が用いられている。

バス、自転車、徒歩の多くは、居住地区または町田駅周辺の訪問先への移動で用いられている。自転車と徒歩は移動速度が遅く、また長距離の移動には体力が必要なため、それらの地域以外では多く用いられなかったのであろう。

3. 日常的余暇

日常的余暇でも、これまでの類型と同様に東京都心へは鉄道が用いられている。一方、町田駅から10km圏内では、短時間観光と同様に多様な移動手段が用いられているものの、自転車が184件中59件で最も多く、自家用車は53件で2番目に

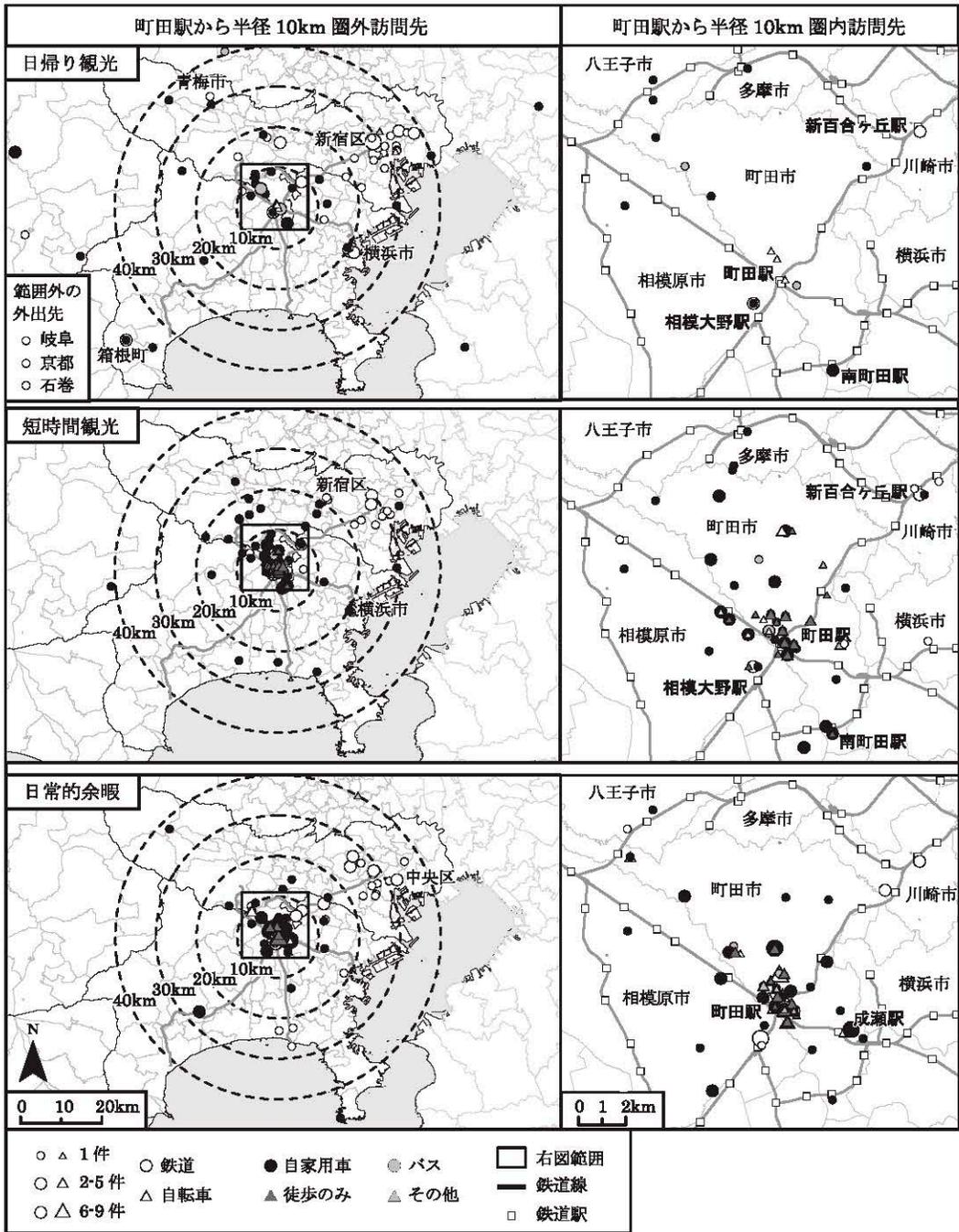


図7 移動手段と訪問先の関係

(アンケート調査より作成)

位置している。Ⅲで指摘したように、日常的余暇は町田駅周辺に最も外出先が集中しているため、徒歩よりも容易に移動のできる自転車の利用が最多であったと推測される。

町田駅から10km圏内の鉄道と自家用車利用に関しては短時間観光と傾向に大きな差はなく、鉄道は新百合ヶ丘駅や相模大野駅周辺への外出で用いられ、自家用車は町田市北部や相模原市との市境、鉄道線からやや離れた場所で用いられている。成瀬駅周辺へは日常的余暇で自家用車利用での外出が目立つが、ここは300台近くの自動車が駐車可能な市営運動施設への外出であり、交通利便性が考えられているといえよう。

このように、各類型の訪問先と移動手段の関係を検討すると、すべての類型で東京都心や横浜駅周辺への外出で鉄道が利用されていることが明らかとなった。また、短時間観光や日常的余暇で目的地の集中する町田駅10km圏内をみても、新百合ヶ丘駅と相模大野駅で鉄道利用が目立ち、古淵駅周辺や町田市北部などでは自家用車利用がされているという共通点があった。そして、その要因としては、訪問先までの所要時間や、大規模な駐車場の有無、訪問先の立地などが共通していた。すなわち、外出時間や訪問頻度に関わらず、活動対象地までの移動では利便性の良さが考慮されているといえよう。

Ⅶ おわりに

これまで町田駅周辺住民の余暇活動を外出時間および訪問頻度の観点から類型化し、それぞれの訪問先の分布とその特徴を就業状況および活動目的、移動手段から分析した。

まず、訪問先の分布では、日帰り観光は東京や横浜といった大都市や町田駅から40km圏外に広がっている一方で、短時間観光と日常的余暇の外出範囲は町田駅から10km圏内に集中していた。

この日常性の高い外出ほど行動範囲が狭い点については、高橋・高林（1978）や落合（1991）の結果と共通している。本研究ではさらに、非日常的な外出の場合、外出時間の長さによって訪問場所が異なることも明らかにした。

次に、対象者の就業状況から活動曜日と訪問先までの距離を分析した。その結果、非就業者は休日より平日の活動の割合が大きい一方で、就業者は平日に日帰り観光や短時間観光を行っていくことが明らかとなった。鄭・洪（1999）は、就業者が平日よりも休日に余暇活動へより長く時間を費やすことを明らかにしている。しかし、本研究の結果は、単に休日のほうが余暇活動のための外出時間が長くなるのではなく、非日常的な場所への外出の場合、就業者は時間の長短に関わらず、それを休日に行くことを示している。

高橋・高林（1978）や落合（1991）における余暇活動類型では、就業者が平日の仕事後に2～3時間行う余暇活動を平日型余暇活動、週末に半日から1日かける余暇活動を週末型余暇活動としている。ところが、短時間観光は就業者にとって、そのどちらにも属さない、休日の半日未満の活動という特性を有していた。これは、仕事が外出の制約となり、たとえ短時間の活動であっても、非日常的な場所への外出が仕事後に行いにくく、訪問先が固定されていることを示している。

就業者が短時間観光を休日に行っており、専業主婦も余暇活動の実施に育児の影響を受けていなかったことから、次に活動目的や移動手段といった余暇活動の能動的側面からも、余暇活動類型ごとの特徴を明らかにした。活動目的に着目したところ、日帰り観光と短時間観光は、見物・鑑賞や体験、飲食が多くを占める一方、日常的余暇は運動、趣味・創作活動の割合が他の二つの類型よりも高くなった。高橋・高林（1978）や落合（1991, 1994）では平日型余暇活動と休日型余

暇活動で活動目的が異なるとしているが、本研究の結果は外出時間の長さよりも、訪問頻度によって活動目的が変化する傾向にあることを示している。

ただし、活動目的が類似している日帰り観光と短時間観光であっても、具体的な活動と訪問先をみると、両者には差がみられた。日帰り観光では訪問先にしかない代替性の小さいものを対象とした芸術鑑賞や音楽鑑賞が多くみられた一方で、短時間観光では飲食や祭りの見学が多くあった他に、大型商業施設が訪問先として選択されていた。この結果から、日帰り観光の訪問先が広範囲に分布した背景として、単に長時間の移動を伴ったためだけではなく、杉本ほか（2013）が示唆した芸術鑑賞といった長時間が必要な活動が行われたことと、訪問先にしかない魅力が長時間の滞在を促したことが推測される。

また、吉田ほか（2008）では短時間観光の特徴的な活動目的として、特産品に限らない買物や飲食、散策を挙げた他に、商業施設での買物も重要な活動目的になると指摘している。Vで示された短時間観光での飲食の割合の高さと、飲食および体験の商業施設での実施の多さは、吉田ほか（2008）の指摘を裏付けたものとして位置づけられる。

移動手段では、外出時間の長さや訪問頻度に関わらず、効率的なものが利用されていた。落合（1991）では都市的な対象地は鉄道による所要時間によって、郊外の対象地は自家用車による所要時間によって規定されるとした。本研究の結果でも、東京都心や横浜、町田駅と新宿駅を結ぶ小田急線沿線上の駅へは鉄道が利用され、都市的余暇活動が行われていた。しかし、特に短時間観光では鉄道沿線にありながらも、大規模な駐車場を完備した大型商業施設での都市的娯楽は自家用車が利用されている。これは1990年代以降に大型商

業施設が郊外地域に進出していったことが背景にあると考えられる。

以上をまとめると、日帰り観光は訪問先にしかないものを対象とした、見物・鑑賞、体験、飲食を目的とした大都市や町田駅から40km圏外での活動であり、短時間観光は最寄りの商業施設、町田駅周辺施設での見物・鑑賞、体験、飲食を目的としたものである。日常的余暇は、習慣的に行われる運動や定期的に行く必要のある習い事を目的とした、町田駅周辺への外出である。そして、短時間観光と日常的余暇は同じ空間的範囲で行われる傾向にあり、同じ空間の中で活動目的に応じた訪問先の使い分けがなされていた。

【付記】

調査にご協力いただいた東京都町田市旭町地区・中町地区・原町地区・本町地区・森野地区の皆様にお礼申し上げます。また、本稿の作成にあたっては立教大学観光学部の杜国慶先生にご指導を賜りました。なお、本論文は2013年立教大学大学院観光学研究科に提出した修士論文を大幅に加筆・修正したものである。

注

- 1) 必ずしも平日に行われるのではなく、休日に行われることもあるとしている（落合，1991）。
- 2) 2014年1月1日現在。
- 3) 訪問先とその最寄り駅を記入するよう求めた。
- 4) 一元配置分散分析は3つ以上の群の母平均を比較する際に、1つの量的変数に対して、群に分ける要因が1つであるような場合に用いられる。また、本研究ではTukey-Kramerの検定を行うことにより、余暇活動類型間の町田駅から目的地までの平均直線距離に、有意差があるか否かについて分析した。
- 5) 食事、排せつ、睡眠のための時間である。
- 6) 何らかの職業に従事して働き、さまざまな義務を果たす時間である。
- 7) 1日24時間のうち生理的必需時間と社会生活時間に属さない時間である。
- 8) アンケート配布地域が町田駅にまたがっているため、訪問先までの距離を町田駅を起点として計算した。

- 9) ここで「横浜駅周辺」ではなく「横浜周辺」としているのは、横浜駅が町田駅から20km未満に立地しているためである。
- 10) 本研究では『2011年度町田市市民意識調査報告書』において、住民の83.3%が最寄駅を町田駅と回答した。旭町地区、中町地区、原町田地区、本町田地区、森野地区を町田駅周辺としている。
- 11) 3類型の見学・鑑賞の町田駅から訪問先までの平均直線距離を、Tukey-Kramerの検定で比較した結果、日帰り観光と短時間観光は $p < 0.05$ であった。
- 12) アンケート配布時期に町田駅周辺商店街での祭りと東京都立高等学校での学園祭が行われていたため、祭り見学の件数が短時間観光の見学・観賞の中で最多となった。
- 13) 3類型の体験の町田駅から訪問先までの平均直線距離を、Tukey-Kramerの検定で比較した結果、日帰り観光と短時間観光、日帰り観光と日常的余暇は $p = 0.00$ であった。また、飲食について、同様の手法で比較したところ、日帰り観光と短時間観光は $p < 0.05$ であった。一方で、日帰り観光と日常的余暇は $p > 0.05$ であり、有意な差は認められなかった。
- 14) 回答者の中には太極拳を習いに、教室のある台東区へ外出する例もみられた。

文 献

- 浅香幸雄・沢田 清 (1970) : 神奈川県中・西部における都市圏の変容. 地理学評論, 43, 323-337.
- 荒井良雄・岡本耕平・神谷浩夫・川口太郎 (1996) : 『都市の空間と時間 : 生活活動の時間地理学』古今書院.
- 上間創一郎 (2009) : 観光事業としての映画興行の可能性 : 九〇年代におけるシネマコンプレックスの台頭とその諸影響. 応用社会学研究, 51, 167-174.
- NHK放送文化研究所 (2016) : 2015年国民生活時間調査.
- 岡本耕平 (1995) : 大都市圏郊外住民の日常活動と都市のデイリー・リズム : 埼玉県川越市と愛知県日進市の事例. 地理学評論, 68A, 1-26.
- 岡本伸之 (2001) : 観光と観光学. 岡本伸之編『観光学入門』有斐閣, 1-28.
- 落合康浩 (1991) : 神奈川県中西部における余暇活動の空間的展開. 経済地理学年報, 37, 245-265.
- 落合康浩 (1994) : 都市地域住民の週末型余暇活動における空間構造. 地理誌叢, 36, 23-33.
- 小島政孝 (2009) : 『保存版 ふるさと町田』郷土出版社.
- 鄭 美愛・洪 顕哲 (1999) : ニュータウン地域における余暇行動の特性 - 福岡県小郡・筑紫野市ニュータウンを事例として -. 地域調査報告, 21, 111-121.
- 杉本興運・岡野祐弥・菊池俊夫 (2013) : レンタサイクル利用による観光回遊行動の実態 - 長野県安曇野市におけるGPS・GIS支援による調査とデータ解析. 観光研究, 24, 15-27.
- 瀬沼克彰 (2004) : なぜ「余暇学」か. 瀬沼克彰・藪田碩哉『余暇学を学ぶ人のために』世界思想社, 1-17.
- 瀬沼克彰 (2005) 『余暇の動向と可能性』学文社.
- 藪田碩哉 (2008) : 『余暇の論理』叢文社.
- 高橋伸夫・高林清和 (1978) : 浜松市における余暇圏の構造. 筑波大学人文地理学研究, 2, 95-108.
- 日本生産性本部編 (2014) : 『レジャー白書2014 - マイ・レジャー時代の余暇満足度』生産性出版.
- 橋本俊哉 (1993) : 徒歩スケールにおける観光回遊行動に関する研究 - 飛騨高山での外国人観光者の回遊実態 -. 観光研究, 5, 11-20.
- 前田 勇・橋本俊哉 (2010) : 「観光」の概念. 前田 勇編『現代観光総論』学文社, 5-15.
- 吉田 樹・杉町大輔・太田悠悟・秋山哲男 (2008) : 都市地域の短時間観光行動の実態とその調査手法構築に向けた基礎的検討. 観光科学研究, 1, 9-18.
- 若生広子・高橋伸夫・松井圭介 (2001) : ライフステージからみた女性の観光行動における空間特性 - 仙台市北部住宅地の居住女性を事例として -. 新地理, 49, 12-33.
- Vassiliadis, C. A., Priporas, C. V. and Andronikidis, A. (2013) : An analysis of visitor behavior using time blocks : a study of ski destinations in Greece. *Tourism Management*, 34, 61-70.
- Lew, A. and McKercher, B. (2006) : Modeling tourist movement a local destination analysis. *Annals of Tourism Research*, 33, 403-423.